献杯の辞

2016 年 10 月 29 日　川手昭二

石田君の想い出

今から 62 年も前の話ですが、　高山先生から、池袋の再開発基礎調査を命じられて、大学院生の川上秀光君が「共同研究をしよう」と、学部 4 年の石田頼房君を誘いました。

川上君は、調査の方法について、高山・小嶋方法論＊1（土地利用実態調査→再開発しやすさ判定図）を説明した時、石田君は「再開発の結果に対する敷地利用者の満足の内容は？」、と問いただしたうえで、「農村建築の勉強が、一段落したら、都市開発を研究するかもしれないが、今は未定なので、参加しません」と断られたことを、私に報告しました。

「農村建築研究会」は、西山卯三先生「住まい方の研究」の方法を発展させていた吉武研の一つグループで、もう一つのグループは公営住宅の標準設計研究に力を入れていました、石田君は吉武研に行くな、と私は思いました。

今から 60 年前、私は、「吉武研が作成した標準設計を採用した住宅公団」に就職して、ニュータウン開発に取り組み始めたころ、石田君が高山研に来たと聞いたとき、高山・小嶋方法論を、修正し完成させる気になったなと思いました。

それから 3 年後。石田君から「公団のニュータウン開発の協同研究をしよう」と声をかけてきましたので、OK と答えましたが、研究方法の見当が付かず迷っているうちに、ニュータウン開発の知識が私より希薄なはずの石田君から、次々と調査項目が送られて来て、言われるままに、ニュータウン現場職員に石田君の宿題を伝え、得られた資料を石田君に返送して作られた論文が、「近郊農家は何故、公団の土地買収に応ずるのか。」＊2 でした。

「農村建築の研究方法」に見切りをつけて、ニュータウン開発の研究に乗り換えたのではなくて、ニュータウン開発という外圧に直面した農家の、生活対策の実態を把握する研究へ舵を切ったのです。

石田君は、池袋再開発基礎調査に対する質問「再開発の結果に対する敷地利用者の満足の内容は？」と問い返した問題意識に拘り続けて、「近郊農家は何故、公団の土地買収に応ずるのか。」を明らかにするための研究だったのです。

石田君の研究姿勢は、一貫しているなーと 54 年前思いました。

高山研究室から、御茶ノ水駅に歩いて帰る、信号待ちの話ですが、自動車が見えなければ、川上秀光君や、宮沢美智雄君は、信号が赤でも構わずに横断するのに、石田君は信号が青になるまで絶対に横断しない、なので僕たちは、信号が青になって石田君が渡って来るまで待ちながら、議論していました。

「石田って法律厳守主義者だ！」いや違う「法律を変えることが、正義を実現する道と思い込んでる主義者なんだ！といった、議論の種を捲いた石田君は、著書『日本近代都市計画の百年』（改訂増補版『日本近現代都市計画の展開』）を「理想を貫く法律」の視点で答えてくれました。また大学院生に戻って、4 人で議論し直したい気持ちです。

石田君とは研究テーマの話ししかしたことのない、堅物同士の友達でしたが、本日、石田君のお弟子さんたちの研究発表を聞かせて頂きました。その成果品を基に、今日からまた一人で、石田研究方法をかみしめながら、残された時間を歩み続けることを誓います。空の上から見守っていてください。かけがえのない畏友・石田頼房君、有難う。いつまでも忘れません。

＊1　高山・小嶋方法論（土地利用実態調査→再開発しやすさ判定図）
土地利用実態調査：
1〕登記簿調査：土地所有者名（A）建物所有者名（A. or B.）
2〕現地調査：敷地の寸法・建築物の配置図・建物利用者名（A. or B. or C.）
3〕敷地利用構造：①A-A-A　、②A-A-C　、③A-B-B　、④A-B-C
再開発しやすさ判定図：
1〕「再開発しやすさ」の定義：① ＞ ② ＞ ③ ＞ ④
2〕再開発しやすさ判定図：街区を構成する敷地に「敷地利用構造の番号」を記入。
3〕東京戦災復興計画の人口配分計画立案の基礎資料として、高山研究室が「再開発しやすさ判定図」を、建設省に提出すると聞きましたが、学術論文に仕上げることは出来ませんでした。
＊2　「近郊農家は何故、公団の土地買収に応ずるのか。」
日本住宅公団施行の区画整理事業で、鉄道駅が新設される区域の、1 町歩の畑を持つ農家にとって、1/3 の土地を公団に売却して、残りの 2/3 に 35%の減歩を掛けられても、畑地が集約されれば、後継者が跡を継がなくとも、労働集約型の軟弱野菜経営が可能になり、土地の売却費で三輪オートバイを買い入れ、朝採り野菜を市場に直接売りに行くとさらに経営は楽になる。「近郊農業」への転換を決意する機会になった。
日本住宅公団の企画部門は、この論文を根拠に地元説明をすることが出来たのです。